



システマティック臨床精神医学—4つの多元的観点による治療体系化—

澤 明 監修, 成田 瑞 監訳
 中外医学社
 2024年6月 154頁
 本体価格 2,700円+税

本書は、全米において最高の評価を継続的に受けているジョーンズホプキンス大学で教育に携わるマーガレット・チズム、コスタス・ケレストスによって書かれたテキスト『Systematic Psychiatric Evaluation』の翻訳本である。長く同大学で教授として活躍されている澤明先生が監修を担当し、同氏のもとで学んだ日本人精神科医が翻訳を担当している。その内容はきわめて臨床的であり、まずパート1で精神疾患を有する患者を、その疾患、特質、行動、生活史という4つの観点から多元的に理解する方法を学び、パート2では双極性障害、精神病、あるいは過量服薬や記憶と気分の問題、肥満恐怖や死別にいたるまで実にさまざまな症例を通じて、多元的アプローチを実践する手ほどきを受けられるようになっている。なお本書は、やはりジョーンズホプキンス大学で教鞭を執り、本書の著者らの師にあたるポール・マクヒューとフィリップ・スラヴニーによって書かれたテキストである『The Perspective of Psychiatry』と同じ臨床的思想のもとに書かれており、それを実例によって解きほぐしたものである。同著の翻訳本はみず書房から『現代精神医学』として2019年に出版されており、興味のある方はそちらも一読をお勧めする。

もう少し具体的に内容を紹介しますと、実践編の1例目は、双極性障害の老婦人である。心筋梗塞の既往と新たに生じた胸痛による不安から、服用していたリチウムを中断した後、多幸的、誇大的となって躁状態が再発したケースで、診断的には決して難しいものではない。しかし、本書

では、この症例に対して担当医がまずきちんとした役割の導入を行った後に、丁寧な問診とそれに基づく精神現症のまとめを行い、さらに詳細な生活史の聴取、パーソナリティや生活環境といった特質の把握、生理学的衝動や条件づけ学習といった行動の分析、そして臨床症候群と病理学、病因といった疾患モデルの構築という4つの観点から、本症例の精密な定式化の作業を行っている。その後、治療チームは副作用をはじめとする彼女の憂慮に気を配りつつ、最終的には服薬再開への本人の同意を得ることができた。彼女は退院時に「この病気（双極性障害）は、多くの興味深いことを探索する意欲、好奇心、力を私に与えてくれた」と語り、治療チームは患者の尊厳を損ねることなく気分の安定を得て退院に導いている。たとえ疾患が原因であることが容易にわかるときでも、役割の導入と各観点を丁寧に分析することにより、全人的ケアの必要性に気づくことができ、治療者と患者はより共感的に結びつくことができることを本書は示している。

監修者の澤先生も指摘するように、DSMやICDといった操作的診断基準に沿った診断プロセスだけでは、われわれ精神科医が疾患の理解や治療を行うのには不十分である。なぜなら、それらの診断システムでは、精神科の治療で重要となる疾患の背景や患者のパーソナリティ、治療者と患者の関係性といった点にほとんど注意が払われないからである。書評子は、精神科医にとって真に必要なものは、「見立て」の能力であると考えている。それは単純に患者に診断というラベルを貼るものではなく、面接や治療をとおしてその患者のこころのありようを理解する力であり、患者の人間関係、社会とのつながり、将来のこと、すべてを考えながらその患者の人生と向き合っていくための能力である。本書を読了して、本書がめざすところも、この「見立て」の能力を育てるための、きわめて優れたアプローチであるように感じた。精神医学をこれから学ぼうとする若手の先生方に特にお勧めしたい一冊である。

(中尾智博)